

高等学校書道における臨書学習の深化に関する指導法研究（1）

－『書譜』の書論としての価値を活かす教材化の視点－

瀬 筒 寛 之 [鹿児島大学教育学系（国語教育）]

Methods of teaching through modelling techniques in calligraphy class in high school (1)

－ A class design to make use of the point of “Shofu”, a book on the theory of calligraphy －

SEZUTSU Hiroyuki

キーワード：臨書、草書、鑑賞、書論、書譜

1. はじめに

高等学校の書道の学習においては、「A表現」と「B鑑賞」とを相互に関連させることによって、効果的に表現技法を身に付けることが可能となる。「A表現」の「(1)漢字の書」では、臨書と創作の学習が行われるのが通常で、臨書は、時代の淘汰を経て継承された古典を模範として繰り返し練習することを指し、それにより、伝統的な書法（用筆法・運筆法等）や文字の歴史を学び、普遍性のある表現力を養うことができる唯一無二の方法である。また、「B鑑賞」については、現行の学習指導要領解説（以下『解説』と略記する）に次のような記述がある。

「鑑賞」とは、表現されたものの特性、表現効果、価値などを、美に対する感受性や知的理解の面から味わうことである。書の場合は、表現された文字の造形的な美しさや、そこに込められた筆者の心を見て楽しむとともに、作品の筆者・時代・内容などを探求するということを指している。

（中略）

鑑賞の指導は表現の指導のうち特に臨書の充実のために重要である。¹（傍線は筆者による。）

つまり臨書学習の充実には、鑑賞の学習も重要であると述べられている。この鑑賞の充実の手立てについては『解説』に「互いに批評する活動」を取り入れることなども示されているが、①古典の文意の理解、②書論の活用も有意義であると考えられる。本年度前期に開講した「書道概論」（書論・鑑賞）では、この①、②が同時に達成できる古典として、書論としての価値も高い孫過庭の『書譜』を扱い、書論の価値を臨書学習の深化に役立てる基礎的考察を行った。この講義では、内容理解に資する図版を多く掲載している平勢（1990）²のテキストを用いた。本稿は、『書譜』の要旨から導き出される臨書字例などについてまとめ、草書の臨書学習の深化を志向した授業改善の一助となることを期待するものである。

2.1. 草書の取扱い

孫過庭『書譜』を扱うにあたり、高等学校書道における草書や他の書体の取扱いを整理しておきたい。表1は、『解説』の3「内容」、4「内容の取扱い」をまとめたものである。

「書道Ⅰ」の「A表現」では、書に対する理解を総合的に深めるため、「(1)漢字仮名交じりの書」,「(2)漢字の書」,「(3)仮名の書」の全てが必修である。このうち草書が扱われるのは「(2)漢字の書」,「(3)仮名の書」であるが、「(3)仮名の書」の学習を深める意図のもと、仮名の種類・成立を説明する上で草書の扱いが求められ、これが延伸して「(2)漢字の書」においても草書が選択して扱えるようになったものである。高校で書道を選択した場合の必修科目は、「書道Ⅰ」の2単位である。

「書道Ⅱ」の「A表現」では、「(1)漢字仮名交じりの書」のみが必修で、「(2)漢字の書」及び「(3)仮名の書」から一つ以上を選択して扱うことができる。「(1)漢字仮名交じりの書」における漢字は、楷書、行書及び草書を扱う。選択の「(2)漢字の書」では、楷書、行書、草書、隸書及び篆書の五書体を扱い、生徒は、臨書や創作に当たっての意図や目的に即した活動の幅を広げることができる。

「書道Ⅲ」では、「A表現」の「(1)漢字仮名交じりの書」,「(2)漢字の書」,「(3)仮名の書」及び「B鑑賞」の4つの分野から一つ以上を選択して扱い、各分野を深化・発展させて学習することができる。

以上から、高等学校書道における草書の取扱いは、次のようにまとめることができる。

- ① 「書道Ⅰ」では、「(3)仮名の書」の学習を深めるため、「B鑑賞」の指導において、仮名の種類と成立を理解させる上で草書の活用が求められ、これが延伸して「(2)漢字の書」でも草書を加えることができる。(選択必修科目)
- ② 「書道Ⅱ」では、必須の「(1)漢字かな交じりの書」および選択の「(2)漢字の書」で草書を扱うことができる。
- ③ 「書道Ⅲ」では、「(1)漢字仮名交じりの書」または「(2)漢字の書」を選択して扱う場合、草書を扱うことができる。

表1 高等学校書道における草書及び他の書体の取扱い

	書道Ⅰ (選択必修)	書道Ⅱ	書道Ⅲ
A表現	(1)漢字仮名交じりの書 必修	(1)漢字仮名交じりの書 必修	(1)漢字仮名交じりの書
	書体 楷書・行書 平仮名・片仮名	書体 楷書・行書・草書 平仮名・片仮名	書体 楷書・行書・草書 平仮名・片仮名
	(2)漢字の書 必修 (臨書及び創作)	(2)漢字の書 (臨書及び創作)	(2)漢字の書 (臨書又は創作)
	書体 楷書・行書 に 草書・隸書・篆書も加えられる。	書体 楷書・行書 草書・隸書 篆書	書体 楷書・行書 草書・隸書 選択 篆書
	(3)仮名の書 必修 (臨書及び創作)	(3)仮名の書 選択 (臨書及び創作)	(3)仮名の書 (臨書又は創作)
	書体 平仮名、片仮名 変体仮名	書体 平仮名、片仮名 変体仮名	書体 平仮名、片仮名 変体仮名
B鑑賞	エ 漢字の書体の変遷、仮名の成立等を理解すること。 *草書体の説明を加える。	(草書に関する特記事項なし)	(草書に関する特記事項なし)

2.2. 書論の取扱い

孫過庭『書譜』は、書について書かれた理論つまり書論である。書論は、中国の後漢時代以降、また日本の平安時代以降数多く著されている。その内容は幅広く、文字学、書体、表現方法、様式、学書法、評論・鑑賞、筆者・作品、文房具、書の本質や文化史等に関する理論である。学書の過程では表現活動に重きが置かれがちだが、先人の書論を講読することによって、歴史を踏まえた深い鑑賞が可能となり、また学書方法や書の見方等についての理解が深められ、書への興味・関心が高められることにもなる。

高等学校書道における書論の取扱いであるが、「書道Ⅰ」、「書道Ⅱ」の指導事項には書論の項目は見えない。ようやく書道Ⅲ「B 鑑賞」に、「イ 書論を講読し、書の理解と鑑賞の深化を図ること。」との記述があり、書の理解と鑑賞の深化に書論の講読が有意義であることが示されている。手元の「書道Ⅲ」の教科書には、孫過庭『書譜』のほか、尊円親王『入木抄』、王澐『論書贖語』、董其昌『容臺別集』、中林梧竹『梧竹堂書話』、羊欣『古來能書人名』、包世臣『芸舟双楫』などの書論が見え、各書体の古典の合間に、コラムのような形で掲載されている。書論を「書道Ⅰ」、「書道Ⅱ」では扱わず、「書道Ⅲ」の指導事項としているのは、書論の難易度に高校生各学年の学書段階等を鑑みてのことであろう。ただし、平成11年版学習指導要領からは、高等学校における選択必修単元が「書道Ⅰ」の2単位となり、多くの学校で「書道Ⅰ」のみを開講する現況を考えると、「書道Ⅰ」における書論のエッセンスを取り入れた鑑賞指導の有用性を考察することは無意味ではない。書道の目標に掲げられている「生涯にわたり書を愛好する心情を養う」ためには、表現力を育てることと併せて、書を観て楽しみ、書の魅力を他者と共有できるような鑑賞力を養うことも重要である。『書譜』中にも述べられているとおり、書の良し悪しの判断は非常に難しいものがあるが、各人の書への関わり方に応じた鑑賞力の段階的な育成が求められよう。書の文化に関する学習や鑑賞指導の充実が求められる今日、書論の価値を活用する意義は一層高まっている。鑑賞力における理論的支柱が書論であると言える。

3.1. 『書譜』の概要

『書譜』は、唐の孫過庭が書について系統立てて論じた自らの文章を、すべて草書体で書いたものである。唐代の数少ない真蹟の一つとしても貴重なもので、真蹟卷子本は台北の故宫博物院に現存し、本紙約9メートルに369行、3726字が草書体で書かれている³。内容としては、王羲之を中心に、王献之、鍾繇、張芝といった能書家についての論評や、書の学習法、技法、鑑賞法などが書かれていて、理論研究上必読のものとされている。「意先筆後」、「心手相応」等々、書を学んでいると見聞きする文言が実は書譜から採られたものであり、1300年を経た現代でもなお学書者の道標として有意な示唆を与えてくれる本質的な理論であることに気づかされる。『書譜』文末に見える「今、撰して六篇と為し」の「六篇」の区切りについては、朱建新の『評孝』が、清の朱履貞の『書学捷要』の説に基づいて区切る説が支持されている⁴。

また『書譜』の文字は、書聖王羲之の正統的な草書の規範をふまえており⁵、古来、王羲之の十七帖とともに草書学習上の必修古典とされてきた。特に『書譜』は、刻本の『十七帖』と違って肉筆なため、筆遣いや筆勢は一層捉えやすいと言える。字形は、文字の上部を大きく構えて均衡が保たれ、運筆は抑揚・太細の変化に富んでいるなどと評される⁶。王羲之書法を称揚する孫過庭が、その継承に関して最も自信を有していた書体が草書であったのだろう。『書譜』の文体は、六朝時代から唐時代に盛行した四六駢儷文という美文で、対句を基調とし、自然や動

植物等を用いた比喩的表現や典故の多用により、難解なものとなっている。

その他、『書譜』に関する問題として、真蹟本の冒頭に「書譜卷上」とあるのみで、その後に「卷下」の文字が見られないことから、古来、完本か否か、完本とするなら何故「卷下」の文字が見られないのか、議論が行われてきた。これに関しては、

(略) 約三千七百字の長文から成り、しかも草書の毛筆で書かれた大部『書譜』が、その大部さの故にもとも二つの巻軸に装われていたのが、ある時期に一巻に装い直されて「卷下」の標示を脱落したからであろう。真蹟本が全体のはぼ中間、上巻の終り、下巻の初めにあたる部分に百六十余字の脱落をもつ事実が、この推測を最も有力に裏づける。(詳細は朱建新『書譜評考』を参照)。⁷

との論に賛同する向きが多いようである。これについては、書の文化財の伝来に関する問題として紹介することも、学習者の興味・関心を高める一材料として好適ではないかと考えられる。

3.2. 「書譜」各篇の要旨

『書譜』は長文であり、全体の論旨を把握易くするため、要旨をまとめる。(表2)。要旨をまとめるに当たっては、平勢(1990)⁸、福永(1971)⁹、西林(1988)¹⁰、杉村邦彦(1989)¹¹の資料を参考にした。

表2 『書譜』各篇の要旨

巻上	主旨	王羲之の典型が否定され始めていることへの警告
第一篇	範囲と字数	冒頭から「子敬之不及逸少、無或疑焉」までの約五百三十字。
	要旨	張芝・鍾繇・王羲之・王獻之を古今の四賢とし、中でも王羲之に最も高い評価を与えている。
	具体的な 文言等	・羲之の優れているところは先人の長所を拾い取って、各体に通ずることが出来た点である。「兼通」
第二篇	範囲と字数	「余志学之年」から「觀跡明心者焉」までの約九百九十字。
	要旨	自分の学書経過を略述し、四賢の正統を継承する構造を初めて明確にし、書の本質と価値を明らかにした。
	具体的な 文言等	・変化の妙を極めるのは、自然を主宰する造化と一体になった名人においてのみできることであって、努力して習熟すれば誰にでもできるというものではない。 ・義理の回帰 ・一体専修 ・各体兼修 ・五合五乖
第三篇	範囲と字数	「代有筆陣図七行」から「非訓非経、宜從棄拓」までの約四百字。
	要旨	『書譜』を書くに当たって考察した南朝以来の書論を批判している。
	具体的な 文言等	・衛夫人『筆陣図』、王羲之『筆陣図』、王羲之『筆勢論』、「古来の書法論(美辞麗句に終始…、書の外形のことばかり…)」は取り上げない。

巻下	主旨	耳目の学、即ち時流に流されて、己自身の眼で確かめることを忘れた人々への警告
第四篇	範囲と字数	「夫心之所達」から「原夫所致，安有体哉」までの約四百十字。
	要旨	書法論の最も基本的な技法として「執」「使」「転」「用」の四つについて述べ、王羲之の典型は此の上に成り立っていることを説き明かしていく。
	具体的な 文言等	<ul style="list-style-type: none"> ・執（執筆法）、使（直線の用筆法）、転（曲線の用筆法）、用（向背などの結構法） ・王羲之「楽毅論」「黄庭経」「東方朔画賛」「太師箴」「蘭亭集序」「告誓文」は、楷書や行書の極致を示すものである。 ・「楽しさにめぐりあえば笑い、悲しいことを語るときは嘆息する。…書く時の文の異なるにしたがって、それに相応した心情が現れる。そこに王羲之の書の芸術表現としての構造がある。」
第五篇	範囲と字数	「夫運用之方」から「斯皆独行之士、偏翫所乖」までの約六百八十字。
	要旨	書芸術における「心」と「技」、学習と表現について細やかに分析し、王羲之書法の極致を論述する。
第六篇	範囲と字数	「易曰、觀乎天文」から「豈可執冰而咎夏虫哉」までの約五百六十字。
	要旨	書芸術の妙境と批判
	具体的な 文言等	<ul style="list-style-type: none"> ・書の妙境は、古法の習熟による心手相応の境地を経て、無法の境地に存在する。書の真の価値の直覚には玄鑑精通な鑑識眼が求められる。 ・「波瀾の際は、已に濬（ふか）く霊台より発す。」…筆法の躍動は、深く心の奥底から発現するものである。 ・「心手を問つる無く、懐ひを楷則に忘る」…心のままに手が動く「心手相応」の境地に達して、書法を忘れてしまうという高く深い無心の芸境に到達する。 ・「玄鑑精通なるを以ての故に、耳目に滞らざればなり。」…精通した高い鑑識力が書の価値を直覚する。
跋語	範囲と字数	「白漢魏已來」から「緘秘之旨，余無取焉」までの約九十字。
	要旨	書譜撰述の意図

3.3. 「書譜」の書論としての価値（文意）を活かした臨書字例の選文

手元の教科書から『書譜』の臨書字例を拾い挙げてみると、抜粋と集字の二種がある。「書道Ⅰ」の半紙教材として「行雲（集字）」、「書道Ⅱ」の半紙教材として「風雲（集字）」、「斯道逾微方復（斯の道逾微う。方に復た）」、「書道Ⅲ」の半紙用字例として「真以点画為形質（真は点画を以て形質と為し）」、「書道Ⅲ」の半切二行用字例として「草以点画為情性。使転為形質。草乖使転。（草は点画を以て情性と為し。使転を形質と為す。草は使転に乗けば。）」が見える。

臨書字例を選択するにあたっては、各教科書に出ている数例の字例だけでなく、副教材、発展教材として多くの字例を準備し、学習者のニーズに応じて紹介できる準備をしておく必要があるだろう。とはいえ、書譜の文章は3700字超と膨大なため、書論としての文意の価値を臨書学習に活かす観点に絞り、要旨に沿って臨書字例を選

文することにした。平勢(1990)は、前項でまとめた各篇をさらに細分して『書譜』の解釈を示している。本項では以下に、平勢による細分項目毎の要旨相当箇所を抜粋した。要旨は、基本的に句点または読点で区切られた四言、六言の文句になるが、これらの四言、六言の文句こそが、本稿で示す「書論としての価値を活かす臨書字例」である。要旨の中でも特に、端的に各項を代表するような文言がある場合は、キーワードとして下線を施した。主に下線部分を教材化してもよいし、要旨全体の10～20字程度は、半紙～半切2～3行書きのような発展的な臨書教材としてもよからう。

<各細分項目の要旨(臨書字例)・書き下し・キーワード(下線)>

第一篇(*①は第一項の意。以下同様。)

①「考其專擅，雖未果於前規，摠以兼通。故無愆於即事。」

(其の專擅を考するに、未だ前規に果かずと雖も、摠ひて以て兼ね通ず。故に即事に愆づること無し。)

②「貴能古不乖時，今不同弊。所謂文質彬彬然後君子。」

(能く古にして時に乖かず、今にして弊を同じうせざるを貴ぶ。所謂文質彬彬として然る後に君子なり。)

③「雖專工小劣，而博涉多優」(專工小しく劣ると雖も、而も博渉多く優る。)

④「自称勝父，不又過乎」(自ら父に勝ると称すは、又過たずや。)

⑤「雖復粗傳楷則，實恐未克箕筭。」(復粗楷則を傳ふと雖も、實に未だ箕筭を克くせざらんことを恐る。)

⑥「子敬之不及逸少，無或疑焉。」(子敬の逸少に及ばざるは、疑ひ或ること無し。)

第二篇

①「味鐘張之餘列，挹羲獻之前規，極慮專精，時逾二紀。」

(鐘張の餘列を味はひ、羲獻の前規を挹み、慮を極め精を専らにし、時は二紀を逾ゆ。)

②「同自然之妙有，非力運之能成。」(自然之妙有に同じく、力運の能く成すに非ず。)

③「心昏擬効之方，手迷揮運之理。求其妍妙不亦謬哉。」

(心は擬効之方に昏く、手は揮運之理に迷ふ。其の妍妙を求むるも亦た謬たずや。)

④「巧定禮樂，妙擬神仙」(巧は禮樂を定め、妙は神仙に擬え、)

⑤「義理之會歸，信賢達之兼善者矣。存精寓賞豈徒然歟。」

(義理之會歸は、信に賢達之兼ね善くする者なり。精を存し賞を寓すること、豈に徒然ならんや。)

⑥「而東晉士人，(略)咸亦挹其風味。去之滋永，斯道逾微。」

(而して東晉の士人、(略)咸な亦た其風味を挹む。之を去ること滋す永くして、斯の道逾よ微かなり。)

⑦「假令薄解草書，粗傳隸法，則好溺偏固，自闕通規」(則ち好んで偏固に溺れ、自ら通規を闕す。)

⑧「迴互乎雖殊大體相涉。(略)若豪釐不察，則胡越殊風者焉。」

(迴互殊なりと雖も大体相渉る。(略)若し豪釐も察せざれば、則ち胡越風を殊にする者なり。)

⑨「至如鍾繇隸奇，張芝草聖，此乃專精一體，以致絕倫。」

(鍾繇の隸の奇なる、張芝の草の聖なるが如きに至りては、此れ乃ち精を一体に専らにして、以て絶倫を致せるなり。)

⑩「雖篆隸草章，工用多變，濟成厥美，各有攸宜。(略)故可達其情性，形其哀樂。」

（篆隸草草，工用多變なりと雖も，厥の美を濟し成すは，各宜しき攸有り。（略）故に其の情性を達し，其哀樂を形すべし。）

⑪「若五乖同萍，思過手蒙，五合交臻，神融筆暢。」

（若し五乖同じく萍まれば，思過まりて手蒙く，五合交も臻れば，神融け筆暢ぶ。）

⑫「庶欲弘既往之風規，導將來之器識，除繁去濫，觀跡明心者焉。」

（既往の風規を弘め，將來の器識を導き，繁を除き濫を去り，跡を觀て心を明らかにせんことを庶ひ欲する者なり。）

第三篇

①「代有筆陣圖七行。（略）既常俗所存，不籍編録。」

（代に筆陣圖七行有り。（略）既に常俗の存する所なれば，編録を籍らず。）

②「若乃師宜官之高名，徒彰史牒，邯鄲淳之令範，空著縑緗。（略）其有顯聞當代，遺跡見存，無俟抑揚，自標先後。」

（乃ち師宜官の高名の若きは，徒らに史牒に彰れ，邯鄲淳の令範は，空しく縑緗に著るのみ。（略）其の當代に顯聞，遺跡の見存する有るは，抑揚を俟つ無く，自ら先後を標さん。）

③「六文之作肇自軒轅，八體之興始于嬴政。（略）既非所習，又亦略諸。」

（六文の作は軒轅自り肇まり，八體の興は嬴政より始まる。（略）既に習ふ所に非ざれば，又亦諸を略す。）

④「有竜蛇雲露之流，龜鶴花英之類。（略）異夫楷式，非所詳焉。」

（竜蛇雲露の流，龜鶴花英の類有り。（略）夫の楷式に異なれば，詳かにする所に非ず。）

⑤「代傳義之與子敬筆勢論十章，文鄙理疎，意乖言拙。（略）非訓非經，宜從棄擇。」

（代に傳ふる義之の子敬に與へる筆勢論十章は，文は鄙しく理は疎，意は乖き言は拙し。（略）訓に非ず經に非ざれば，宜しく棄擇に従ふべし。）

第四篇

①「冀酌希夷，取會佳境。」（冀くは希夷を酌み，會を佳境に取らんことを。）

②「今撰執使用轉之由，以祛未悟。」（今執使用轉の由を撰し，以て未だ悟らざるを祛らん。）

③「但右軍之書，代多稱習。良可據爲宗匠，取立師歸。」

（但だ右軍の書のみは，代よ稱習するもの多し。良に據りて宗匠と爲し，取りて師歸を立つべし。）

④「所謂涉樂方笑，言哀已歎。（略）豈知情動形言，取會風騷之意，陽舒陰慘，本乎天地之心。」

（所謂，楽しみに涉っては方に笑ひ，哀しみを言ひては己に歎ずるなり。（略）豈に情動けば言に形はれ風騷の意に取會し，陽に舒び陰に慘むは，天地の心に本づくを知らんや。）

第五篇

①「苟知其術，適可兼通。心不厭精，手不忌熟，（略）意先筆後，瀟灑流落，翰逸神飛，」

（苟しくも其の術を知らば，適に兼ね通ずべし。心は精なるを厭はず，手は熟を忌れず，（略）意は先に筆は後にし，瀟灑流落して，翰は逸し神は飛ぶこと，）

②「勉之不已，抑有三時。時然一變，極其分矣。（略）通會之際人書俱老。」

（之を勉めて已まざるに，抑そも三時有り。時然一變し，其の分を極む。（略）通會之際は，人書俱に老ゆ。）

- ③「右軍之書，末年多妙，當緣思慮通審，志氣和平，不激不厲而風規自遠。」
(右軍の書，末年妙多きは，當に思慮通審し，志氣和平にして，激せず厲せず，而して風規自ずから遠きに縁るべし。)
- ④「自鄙者，尚屈情涯，必有可通之理。嗟乎，蓋有樂而不能，未有不學而能者也。」
(自ら鄙しむ者は，尚ほ情涯を屈するも，必通すべきの理有らん。嗟乎，蓋し學んで能くせざるもの有らんも，未だ学ばずして而も能くする者は有らざるなり。)
- ⑤「察之者尚精，擬之者貴似。」(之を察する者は精なるを尚び，之に擬する者は似んことを貴ぶ。)
- ⑥「能速不速，所謂淹留。(略) 非夫心閑手敏，難以兼通者焉。」
(速を能くして速ならざるは，所謂淹留なり。(略) 夫の心閑に手敏なるに非ずんば，以て兼ね通じ難き者なり。)
- ⑦「假今，衆妙攸歸，務存骨氣。骨既存矣。而澹潤加之。」
(假今，衆妙の歸する攸なりとも，骨氣を存せんことを務めよ。骨既に存す。而して澹潤之に加へよ。)
- ⑧「雖學宗一家，而變成多體。(略) 斯皆獨行之士偏翫所乖。」
(學は一家を宗すと雖も，而も變じて多體を成す。(略) 斯れ皆獨行の士の偏翫して乖く所なり。)

第六篇

- ①「況書之爲妙，近取諸身。假令，運用未周，尚虧工于秘奧，而波瀾之際，已溶發於靈臺。」
(況や書の妙たる，近く諸を身に取るをや。假令，運用未だ周ねからず，尚ほ工を秘奧に虧くも，而も波瀾之際は，已に溶く靈臺より發す。)
- ②「無閒心手，忘懷楷則，自可背義獻而無失，違鐘張而尚工。」
(心手を閒つる無く，懷ひを楷則に忘るるが(如きに至りては)，自ら義獻に背けども失無く，鐘張に違へども尚ほ工みなるべし。)
- ③「何必刻鶴圖龍，竟慙真體，得魚獲兔，猶悛筌蹄。」
(何ぞ必ずしも鶴を刻し龍を圖して，竟に真體に慙ぢ，魚を得兔を獲て，猶ほ筌蹄に悛まんや。)
- ④「語過其分，實累樞機。」(語其の分に過ぐれば，實に樞機を累はさん。)
- ⑤「夫蔡邕不謬賞，孫陽不妄顧者，以其玄鑿精通故，不滯于耳目也。」
(夫の蔡邕の賞を謬らず，孫陽の妄りに顧みざりし者は，其の玄鑿精通なるを以ての故に，耳目に滯らざればなり。)
- ⑥「彼不知也。曷足怪乎。(略) 老子云，下士聞道大咲之。不咲之則不足以爲道也。」
(彼は知らざるなり。曷ぞ怪むに足らん。(略) 老子云ふ，下士は道を聞いて大いに之を咲ふ。之を咲はざれば，則ち以て道と爲すに足らざるなり。)

跋語

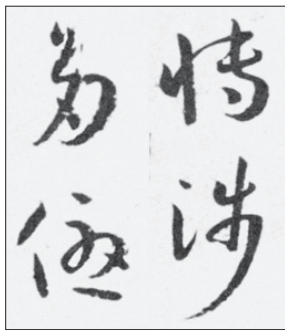
「今撰爲六篇，分成兩卷。第其工用，名曰書譜。庶使一家後進奉以規模，四海知音或存觀省。緘秘之旨，余無取焉。」
(今撰して六篇と爲し，分て兩卷を成す。其の工用を第し，名づけて書譜と曰ふ。庶くは，一家後進をして奉ずるに規模を以てし，四海知音をして觀省を存する或ら使めんことを。緘秘の旨は，余取ること無し。)

3.4. 臨書字例図版の実際

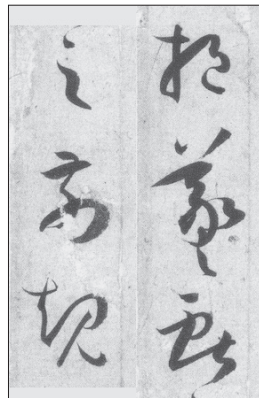
孫過庭が王羲之書法の正統を継承していると自負する『書譜』の草書体を、字形のみに注意して臨書することも大いに有用であるが、孫過庭の実作者としての体系に基づいた書論としての言葉も非常に多くの示唆を与えてくれるものであり、前項で、要旨を捉えて選文した臨書字例を列挙した。下の図1の臨書字例図版は、文末注3および注14の書籍より抜粋し、配列を変えて作成したものである。また西林（1972）は、書譜の典故を通して孫過庭の書の理念を探っているが、その稿末で次のように述べている。

書譜中において、むしろ典故をとらない孫過庭自身のことばの中に、実作者としての経験にもとづく洞察がある。たとえば「五合五乖」、「執・使・用・転」、「使・転・形質」論、「平正→險絶→平正」といった、用筆法や書写の心的状態を説くところがそれである。ここにこそ、孫過程の実作を通して啓蒙する「道」への捷徑の一端を、暗示する。¹³

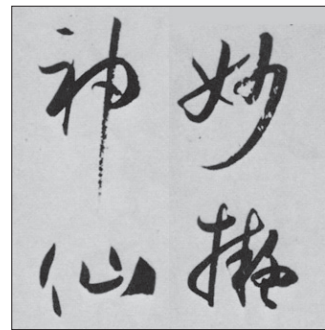
この西林の論を踏まえ、さらに臨書字例に優先順位をつけることもできそうである。



第一篇「博涉多優」



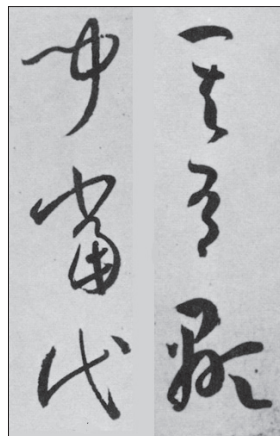
第二篇「挹羲献之前規」



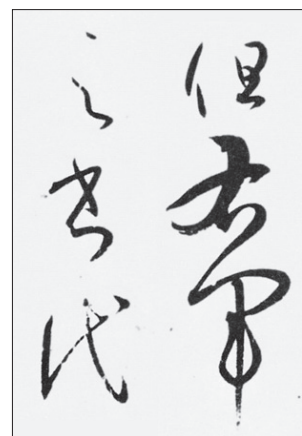
第二篇「妙擬神仙」



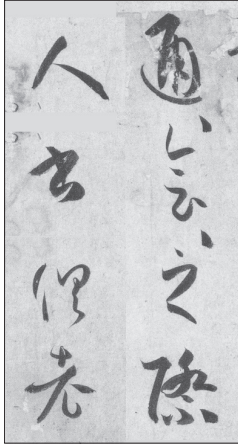
第二篇「專精一體」



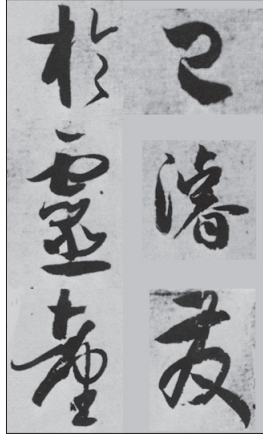
第三篇「其有顯聞當代」



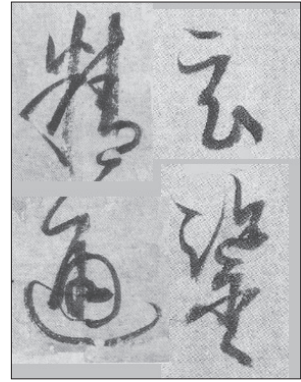
第四篇「但右軍之書代」



第五篇「通会之際人書俱老」



第六篇「已濬發於靈臺」



第六篇「玄鑑精通」

図1 要旨を踏まえた臨書字例図版

4. まとめ

本稿では、臨書学習の深化を目指す指導方法を考察するにあたり、草書字形の典型としてのみならず、書論としての内容の評価も高い孫過庭の『書譜』に焦点を当てた。『書譜』の要旨を活かす視点から教材化を図り、臨書字例の列挙と図版の試作を行ったものである。『書譜』本文は長文なため、要旨の文言だけをとりても臨書字例は多数に及ぶ。教材化においては授業時数や学習者の実態、字形を含む書法の難易、図版の明瞭さ等も考え併せ、更に取捨選択することになろう。半紙に二行の臨書では、主に四字や六字、最大でも十字程度となる。小筆で半紙に三行以上を臨書したり、四つ切りや半切など用紙の拡大等も視野に入れ、臨書字例の要旨の文言を広げることで、さらに書論としての価値が活き、臨書学習の深化が期待できるであろう。臨書字例の更なる精選や授業実践による検証が今後の課題である。

5. 引用文献

- ¹『高等学校学習指導要領解説芸術（音楽 美術 工芸 書道）編』平成21年12月、文部科学省、p.116
- ²平勢雨邨（1990）訳、孫過庭著書譜、精萃図説書法論第二巻、東西書房、pp.177-277
- ³谷村憲斎（1989）、孫過庭書譜、書学体系碑法帖篇、第二十九巻、同朋舎出版、p.102
- ⁴福永光司（1971）、書譜、芸術論集、中国文明選、第十四巻、朝日新聞社、p165、p171、および前掲1を参照。
- ⁵森嶋隆鳳（1988）、書譜、中国法書ガイド38、二玄社、pp.22-33に詳しい。
- ⁶宮崎葵光（1988）、書譜に見る文字の構え、中国法書ガイド38、二玄社、pp.22-27
- ⁷同前掲5、p170
- ⁸同前掲2
- ⁹同前掲4、pp.165-280
- ¹⁰西林昭一（1988）、釈文書譜、中国法書ガイド38、二玄社、pp.40-65
- ¹¹杉村邦彦（1989）、中国書論史概説、書学大系研究篇、第4巻、同朋舎出版、pp.16-17
- ¹²同前掲2
- ¹³西林昭一（1972）、孫過庭の思考のかたち：『書譜』の典故を通して、跡見学園女子大学紀要、Vol.5、pp.37-56
- ¹⁴西林昭一（1988）解説、書譜唐孫過庭、中国法書選38、二玄社